ファシズム期の国家と社会

7

運動と抵抗 中

東京大学社会科学研究所 編

東京大学出版会

執筆者（執筆順）	（執筆時）
馬場康雄（ばば　やすお）	東京大学社会科学研究所助手
竹村英輔（たけむら　えいすけ）	日本福祉大学教授
木村靖二（きむら　やすじ）	立教大学文学部助教授
山口　定（やまぐち　やすし）	大阪市立大学法学部教授
斉藤　孝（さいとう　たかし）	学習院大学法学部教授
戸塚秀夫（とつか　ひでお）	東京大学社会科学研究所教授
田中治男（たなか　はるお）	東京外国語大学教授
斎藤　眞（さいとう　まこと）	東京大学法学部教授

運動と抵抗 中
〔ファシズム期の国家と社会7〕

1979年10月15日　発　行

検印
廃止

© 編著者　東京大学社会科学研究所「ファシズムと民主主義」研究会

発行者　江　村　稔

発行所　財団法人　東京大学出版会
113　東京都文京区本郷　東大構内　電話(811)8814　振替東京6-59964

大日本法令印刷・矢嶋製本

3330—35077—5149

刊行にあたって

本書は、東京大学社会科学研究所が一九七三年から五年間にわたって従事してきた共同研究「ファシズムと民主主義」の成果の一部である。法学、政治学および経済学の諸分野を専攻する所員からなる当研究所は、社会科学にとって共通の重要な課題を選定し、これを全所的規模で数年間にわたって継続して共同研究をおこなう方式をとってきている。こうした共同研究の成果として、『京葉地帯における工業化と都市化』（一九六五年）、『基本的人権』（全五巻、一九六八～六九年）、『戦後改革』（全八巻、一九七四～七五年）が公刊されている。本書の刊行も、これらの仕事とおなじ性格のものである。

私たちは、先に「戦後改革」を共同研究課題として設定して、第二次世界大戦直後の日本社会の変容を解明したが、そのさい「戦後改革」の規定要因として、戦前・戦中の日本社会の構造変化があることを認識するにいたった。こうして「戦後改革」の研究は、歴史的に遡行してそのまえの段階の日本社会を究明する作業へと、私たちを誘ったのである。この意味で、本書は私たちにとっては、「戦後改革」の継続作業にほかならない。もっとも「戦後改革」は、主として日本社会を研究対象としたのに反し、本書での私たちの研究関心は、日本はもちろんのこと、ひろく世界にむけられている。とりあつかわれた諸国はかぎられているが、全体として国際的、比較的な研究といえるようなものにしようと努めた。また「戦後改革」は、占領体制を中心として比較的にみじかい時期に的をしぼりえたが、本書では、第一次大戦から第二次大戦におよぶ「戦間期」と称される比較的にながい時期がとりあつかわれている。

私たちが「戦間期」に着目したのは、まさにこの時期にみられる政治・経済・社会および法律の構造的な変化が、

現代の政治、経済、社会体制の特質を刻印づけたと考えるからである。「戦間期」のうち、とくに私たちは、「ファシズム」期と呼ぶ時代を重視した。それは、イタリアでファッショ運動が本格的に展開する一九二〇年代後半から、ドイツにおいてナチズムが支配しえた一九四〇年代前半までの時期をさす。この時期に焦点を合わせることによって、ドイツ、イタリアのように典型的な「ファシズム」体制をとった社会と、イギリス、アメリカ、フランスのごとく「ファシズム」体制をとらずにすませた社会とを意識して対比しようと考えたのである。すなわち、「ファシズム」を念頭におきながら、「戦間期」の構造変化を明らかにしようと意図した。

周知のように「ファシズム」をどのように概念設定するかをめぐって、論議がわかれており、いまだ学問上の定説はない。本書においては、現代歴史学の成果をふまえて、「ファシズム」分析をおこなう諸論文を収めているのはもちろんであるが、全体として「ファシズム」そのものの研究を目標としているわけではなく、したがって特定の「ファシズム」理解を提示しようとするものでもない。むしろ、「ファシズム」というきわ立った特徴をもつ社会体制を生み、かつ、包含したところの時代背景を、より広く国際的、比較的な視角から解明し、それらが現代とどこでどのようにつながっているか、いないかを、考察しようとするものである。

このような研究を推進するのには、本研究所の現有スタッフをもってしては不十分である。とくに歴史学や政治学の分野において、所外からの多くの研究者の参加・協力をまたなければならなかった。このような共同研究組織を組むことによって、私たちは、あの独特な時期に諸国にみられた社会諸現象を、たんに個別に摘示するにとどまらず、それらを構造的な相互連関のもとにとらえようと試みたのである。

八巻の篇別構成は以下のとおりである。1『昭和恐慌』、2『戦時日本経済』、3『ナチス経済とニューディール』、4『戦時日本の法体制』、5『ヨーロッパの法体制』、6『運動と抵抗上』、7『運動と抵抗中』、8『運動と抵抗下』。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本研究の発足から成果刊行にいたるまでの間、多くの機関、個人から貴重な御協力をいただいた。文部省からは特定研究費および科学研究費の交付をつうじて財政上の支援を受けた。調査に際してはたくさんの方々が資料の提供等にこころよく応じてくださった。また、所外の研究者多数が、あるいは執筆者として参加され、あるいは研究会での発言をつうじて適切な方向づけを与えてくださった。これらのことなしには、このような規模の共同研究を遂行することはとうていできなかったであろう。

最後に、本書の刊行を引きうけて下さり煩瑣な労を惜しまれなかった東京大学出版会の諸氏に心から謝意を表したい。

一九七八年一一月

東京大学社会科学研究所長　石　田　雄

はしがき

本シリーズにおいて、政治ないし政治史の関係の諸論稿は、『運動と抵抗』と題する三冊・六部にまとめて出版されることになっているが、本巻はその二冊目に当るものであり、第三部、第四部が含まれる。共同研究を進めるに際しての関心の方向と問題点、三冊全体の編集の基本方針等については、すでに前巻『運動と抵抗　上』の「はしがき」に記したので、御参照いただければ幸いである。以下、ここでは本巻の内容を概観しておきたい。

前巻においては、第一部として、戦間期の政治状況を大衆運動との関わりにおいて検討した諸論文を、また第二部には、日本における強権的統合の進行に、政治体制の再編成という側面からアプローチしようとした諸論文を収録した。これに対して、本巻に含まれる諸論文は、戦間期欧米諸国におけるファシズム的ないし独裁志向的政治運動の展開と、そのような運動を基礎とした政治体制の形成過程とに焦点を当てて検討したものである。

まず第三部では、ヨーロッパにおいて強権的統合に成功した諸国の事例が分析されている。第八章と第九章の対象はイタリア・ファシズムである。第八章においては、第一次大戦後のイタリア議会政治の危機状況の分析を通して、ファシズム独裁への道が描き出されるし、第九章は、これまでのファシズム分析があまりにも運動の側面に傾斜しがちであったのに対して、独裁体制成立期に凝固してくる、国家の権威主義的再編を理念化する「教義」を検討することによって、ファシズムの本質に迫ろうとするものである。第一〇・一一章の対象はドイツである。まず第一〇章は、ナチス以外の保守的・反共和国的諸党派の政治運動を検討することによって、そこからナチスの抬頭過程がもつ問題状況にアプローチしようとしたものであり、ナチズム研究への一つの新しい視角の提示である。また第一一章は、す

でに多くの研究の蓄積をもつ中間層の動向分析について、研究史の整理を背景としつつ問題点の提示を行なったものである。戦間期ヨーロッパは、イタリア、ドイツ以外にも、スペインにおいて独裁的政治体制を成立させた。第一二章はこのフランコ体制の特質についての覚書である。なお、第三部には、後進的諸国における独裁的政治体制形成の一つの事例としてブラジルの独裁を検討した論文を収録する予定であったが、いくつかの事情のために果せなかった。読者の御海容をお願いしたい。

第二次世界大戦は、民主主義対ファシズムという形で戦われることになったが、一方の陣営である民主主義諸国においても、戦間期に、ファシズム的、擬似ファシズム的、ないしは独裁的なイデオロギーと運動とがみられなかったわけではない。第四部においては、先進的資本主義諸国にみられたこのような運動とイデオロギーがとりあげられる。第一三章では、O・モズレイに焦点を当てつつ、イギリスでのファシズム運動の生成と衰退の特質が描かれるし、第一四章では、右翼的ナショナリズムとしてのアクション・フランセーズが、戦間期にいかなる性格を示すに至るかが検討される。さらに、第一五章では、ヒューイ・ロングという地方的・独裁的政治家の中央政界への進出と挫折との過程を通して、アメリカ社会の危機状況への対応の問題が分析される。これらの諸論稿を通して、民主主義諸国における大衆社会化とそのインパクトが政治の局面に対してもっていた意味を、一つの側面から知ることができよう。

なお下巻には、これら体制側での「運動」に対して各国で起ってきた「抵抗」の問題を検討した諸論文を収録する予定である。

一九七九年九月

有賀　弘

目次

刊行にあたって　石田雄
はしがき　有賀弘

III　独裁的政治体制の形成と展開——ヨーロッパ

第八章　イタリア議会政治の危機とファシズム　馬場康雄
——第五次ジョリティ内閣を中心に——

一　はじめに……五
二　危機の構造……七
　危機の前提条件／戦後の動員と危機の深化
三　危機への対応……二九
　多数派の形成と改革綱領／紛争収拾の技術とその限界
四　革命から反革命へ……四三
　ファシズムの勃興とジョリッティの対応／総選挙とジョリッティの退陣

五　結びにかえて……五七

第九章　イタリア・ファシズムにおける国家の神話

竹村英輔

一　はじめに……六一
二　G・ジェンティーレの倫理国家……六七
三　純粋国家から唯一者崇拝へ……七八
四　A・ロッコの政治的教義……九二
五　神話の「適合性」と「現実性」……一〇三
六　おわりに……一一三

第一〇章　伝統的保守派とナチス

——ヴァイマル共和国における政治運動の転換——

木村靖二

一　問題の所在……一一五
二　敗戦と革命の衝撃……一一七
　オトー・ヘッチにおける〝転換〟意識／全ドイツ連盟のバンベルク声明
三　伝統的保守派の政治組織の構造……一二五
　連合体としての党／連合体の解体
四　ナチスとの競合……一三五
　政治の優位／一一月キャンペーン

五　結びに代えて……一四四

第一一章　ナチスの抬頭と中間層

山口　定

一　はじめに……一四七
二　「中間層のパニック」……一五二
ヴァイマル期中間層の組織状況／「保護主義的要求」の歴史／ナチスの躍進に現われた「中間層のパニック」
三　ナチスによる中間層の獲得……一七〇
ナチ党の中間層的性格／中間層獲得路線の形成／旧中間層の職能団体ごとの獲得／新中間層の獲得
四　むすびにかえて……一八七

第一二章　フランコ体制の特質についての覚書

斉藤　孝

一　序論……一九三
二　「政党統一令」と新ファランヘ党……一九五
三　フランコ体制の変遷……二〇〇
四　研究すべき課題……二〇四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

IV　民主的政治体制下の独裁志向

第一三章　世界恐慌とイギリス・ファシズム　戸塚秀夫
——O・モズレイに焦点をあてて——

一　はじめに ……二〇九
二　イギリス・ファシスト同盟の形成過程 ……二一三
一九二〇年代のファシスト的諸組織からの流れ／労働党——→新党からの流れ
三　イギリス・ファシスト同盟の思想と行動 ……二三〇
『より偉大なブリテン』／街頭闘争／社会的基盤
四　結びにかえて ……二五〇
イギリス・ファシスト同盟の崩壊過程／イギリス・ファシズムの示唆するもの

第一四章　ファシズム期におけるフランスの右翼　田中治男
——Ch・モーラスとアクション・フランセーズを中心に——

一　ファシズム論のなかのアクション・フランセーズ ……二五九
二　フランス・ナショナリズム運動のなかのアクション・フランセーズ ……二六八
三　ファシズム運動とアクション・フランセーズ(1) ……二七八
——モーラスとヴァロワ——

四　ファシズム運動とアクション・フランセーズ(2)
——三〇年代の状況のなかで——……二八八

第一五章　ヒューイ・ロングとニューディール政治　斎藤　眞
——大衆民主政下の政治力学——

一　はじめに……二九三
二　地方政治家としてのヒューイ・ロング……二九七
三　全国政治におけるヒューイ・ロング……三〇六
四　ヒューイ・ロングの果した役割……三一五
五　おわりに……三二一

ファシズム期の国家と社会

7 運動と抵抗 中

Ⅲ

独裁的政治体制の形成と展開

――ヨーロッパ――

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com